

持続可能な教育モデルとしての

「北九州ステップアップメソッド（コグトレ）」の効果的な活用を目指して ～教師の困り感やニーズにこたえる支援と周知方法の工夫～

所属機関 北九州市立教育センター
現所属校 北九州市立湯川小学校
職・氏名 主幹教諭 上田 希

1 主題設定の理由

本市教育委員会では、SDGs の掲げる「誰一人取り残さない」の理念を意識した「質の高い教育をみんなに」というゴールの実現に向けて、令和3年度から令和5年度までの3年間、「北九州ステップアップメソッド（コグトレ）」という名称でコグトレを活用した効果的な集団へのアプローチ方法について、広島大学との共同研究に取り組んできた。

本市における「コグトレ活用における実施状況調査」（R5.5月実施）によると、約86%（小：約92%、中：約79%）の学校がコグトレを実施していた。しかしながら、実施単位（学校・学級・個人）や実施方法、認知度には偏りがあり、効果的な行い方を理解し、目的や意図に応じてコグトレに取り組んでいる学校ばかりではない。支援希望校には、訪問による実践参観を伴う研修及び学校の実態や要望に応じた研修を実施してきたが、事業（学校力向上支援訪問）の特性上、各校への訪問による指導及び研修を複数回行うことが難しく、継続的な支援やコグトレ活用状況についての経過の把握が不十分であった。

3年間の研究期間終了後は、研究による成果物や実践事例をもとに各校が自立してコグトレを活用していくようになることから、本主題を設定した。

2 主題・副題について

(1) コグトレとは

コグトレ®（Cog-Tr）は、認知〇〇トレーニング（Cognitive〇〇Training）の略称で、【資料1】のように「社会面」「学習面」「身体面」の3つのトレーニングで構成された認知機能の向上を目指す学習プログラムである。各方面において様々な課題（トレーニング）やレベルがあり、継続して取り組むことで、学習や生活の基盤づくりにつながる。

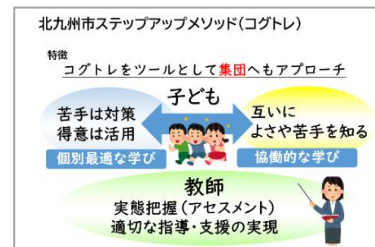


引用：コグトレ®学会ホームページ
(URL : <https://cog-tr.net/cogtr>)

【資料1】コグトレの構成

(2) 「北九州ステップアップメソッド（コグトレ）」について

個の実態に応じた課題の実施を通して認知機能の向上を目指すコグトレに、話し合い活動や振り返り活動などを組み合わせたのが北九州市独自の教育モデルである。コグトレをツールとして、集団へのアプローチと子どもの実態把握を行い、個や集団に対する適切な指導支援の工夫につなげることを目指す。【資料2】



(3) 「持続可能な教育モデル」について

教師や子どもがコグトレの実施方法や効果を理解、実感できるようにするとともに、各学校・学年や学級において無理なく実施でき

【資料2】「北九州ステップアップメソッド（コグトレ）」(イメージ図)

るようにしていくことで、持続可能な教育モデルとして今後も活用されることが期待できる。

3 研究の目的

どの学校・学級・子どもに対してもコグトレを通したよりよい指導・支援を行うことができるようにするために、「北九州ステップアップメソッド（コグトレ）」の目的や効果をより分かりやすい形で周知するとともに、「どの教師も」「無理なく」「効果的に」コグトレを実施できるよう、コグトレ実施までの道筋、指導計画モデルの提示、実施する際の補助教材（掲示物）等の作成、情報のパッケージ化を目指す。

4 研究の手立て

(1) コグトレの取組状況、実施における課題、資料活用状況の把握

学校力向上支援訪問でのアンケートと、本センター主催のコグトレ研修の振り返りを分析して、コグトレ実施の初期段階にある教師が実施において難しいと感じた背景や要因、取組を始めるにあたって必要としている資料・情報・支援を把握する。また、既にコグトレを実施している教師がさらに効果的に活用していくために、どのような情報や支援等を求めているのかを把握する。

(2) 教師のコグトレ実施への抵抗感を減らし、活用への意欲を高める

コグトレ実施への抵抗感を減らし、「無理なく」取り組めるようにするために、コグトレ実施の初期段階にある学校・教師が実施方法や効果を知ることができるようにするとともに、資料等を活用しやすくし、課題実施の見通しがもてるようにする。また、準備に掛かる時間や手間の削減を図り、コグトレの実施・活用につなげる。

(3) コグトレの集団での実施方法、効果的な活用の仕方の周知

令和3年度からのコグトレ研究の成果物や実践事例、補助教材等、コグトレに関する情報を提供している様々な媒体を互いに関連付けることで、情報のパッケージ化を図る。

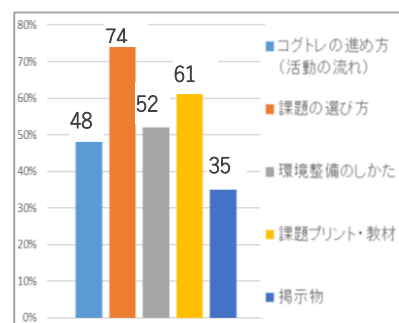
5 研究の実際

(1) コグトレの取組状況、実施における課題、資料活用状況の把握

学校力向上支援訪問での事前・事後アンケート、教育センター主催のコグトレ研修（2研修）の振り返り（記述）からは、コグトレの実施頻度や教育課程への位置づけ、課題の種類や選び方等、具体的なニーズや課題に関する記述が多く見られた。【資料3】

<p>【ニーズ】</p> <ul style="list-style-type: none">・どのぐらいの頻度・種類を実施したのか具体的に知りたい。・友達と協力して取り組む課題やどんな課題の種類があるかを知りたい。 <p>◇<u>児童の成長につながるのであれば、2学期から取り組みたいと思っている。そのためには自身の学びを深めたい、準備をしたいので、夏休み中に動画やワークシートなどをサイトに載せてもらえるとありがたい。</u></p> <p>◇<u>(実践発表で)実践している場面を動画で見たかった。</u></p> <p>【困り感・課題】</p> <ul style="list-style-type: none">・今年度から本格的に始めてみたものの、どのように進めたらよいか分からず手探り状態。・実施時間をどう確保し、位置づけるとよいか。・週2回取り組んでいるが、子ども達にコグトレをする意義を伝えきれていないことが課題。・教材選定や印刷、採点等教師の負担が増えることは課題だと感じた。
--

【資料3】コグトレに関する教師のニーズ・困り感・課題（一部抜粋）



【資料4】事前アンケート（複数選択可）

学校力向上支援訪問の事前アンケートの「コグトレを実施する上で、どんなものがある

れば・どんなことが分かればよいと思いますか。（複数選択可）」という項目では、「課

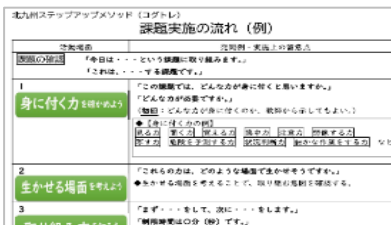
題の選び方」(74%)、「課題プリント・教材」(61%)「環境整備のしかた」(52%)を選択した教師の割合が高かった【資料4】。学校力向上支援訪問での研修後、掲示物に関する資料データを提供してほしいという要望も挙がった。

(2) 教師のコグトレ実施への抵抗感を減らし、活用への意欲を高めるための工夫

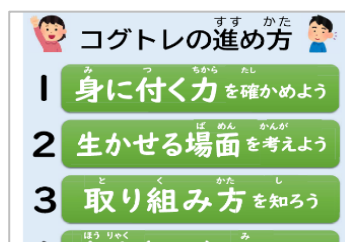
学校・教師が抵抗なくコグトレを実施できるよう、一例として、次項のような参考資料や掲示物を作成したり、既存の資料を整理したりして提供できるようにした。これらは印刷してすぐに実践場面で使用できるようデータを掲載している。【資料5～7】



【資料5】身に付く力カード
集団実施で板書用として活用できる。課題を通して身に付く力を子どもと共有する。

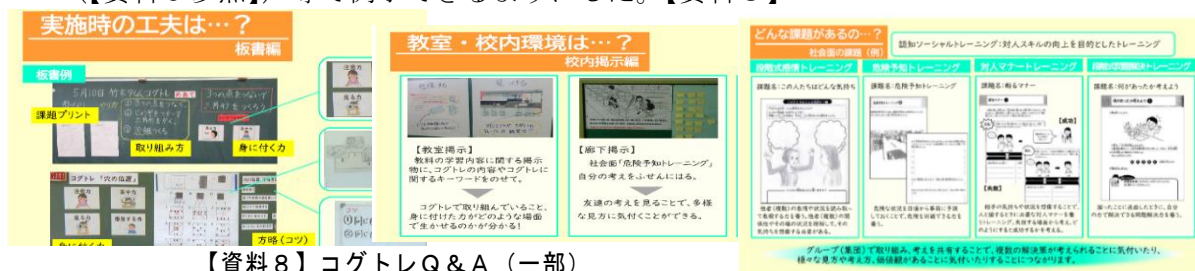


【資料6】課題実施の流れ(例) (教師用)
集団実施する際の発問や実施上の留意点を記載。「コグトレ活用ハンドブック」の「各課題実施案」と対応させており、多くの課題に対し活用できる。



【資料7】コグトレの進め方(掲示)
「課題実施の流れ(例)」と対応している。板書等に掲示することで、コグトレの流れを子どもが確認できる。

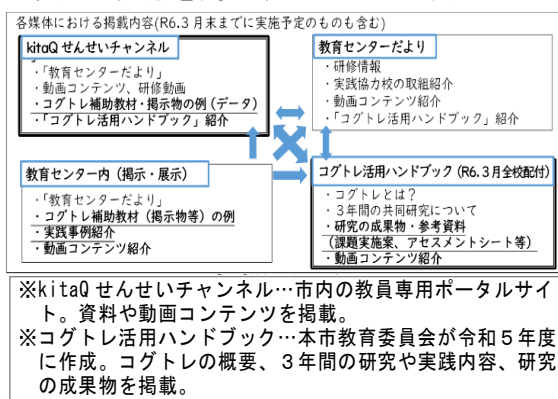
また、教師がコグトレを実施・活用していく中で、よりより実施方法を学んだり工夫したりできるように、好事例や集団での取組モデルをカテゴリー別(時間設定、課題実施の様子、環境整備等)に分類して整理し、ポータルサイト「kitaQ せんせいチャンネル」(【資料9参照】)等で例示できるようにした。【資料8】



【資料8】コグトレQ&A (一部)

(3) コグトレの集団での実施方法や効果的な活用の仕方を周知するための工夫

令和3年度からのコグトレ研究の成果や補助教材等、コグトレに関する情報を提供している様々な媒体を関連付け、「情報のパッケージ化」を図った【資料9】。コグトレ関連情報をパッケージ化し、情報や資料を活用しやすい形で整理・掲載することで、コグトレの実施や活用に必要な情報を効果的かつ効率よく見つけ、活用できるようにした。



【資料9】情報のパッケージ化 (イメージ図)

6 考察

コグトレを実施・活用できるようにするためには、教師の「分からない」「知りたい」という「困り感」や「ニーズ」に応える支援や情報提供が求められていることが分か

った。特に、「実施時間・頻度」「課題の内容や選び方」「進め方」が分かるようにすること、「実施にかかる準備等」の負担軽減を図ることが、コグトレの実施・活用へとつながると考えられる。手だて(2)において、参考資料や掲示物等の作成・整理・提供を行ったことは、教師の困り感やニーズに応え、コグトレの実施につながる適切な支援になったといえる。

・コグトレのはじめの一步を知ることができた。実践できそうな課題がたくさんあったので、早速やってみようと思った。
 ・コグトレが体験できたので、児童と進めるときのイメージをもつことができた。現在、週1回、学校全体で同じ課題シートに取り組んでいるが、子どもの実態、付けたい力を考えて、課題に取り組みたい。
 ・教科の学習以上に必要なトレーニングなのではないかと思った。特にコロナ禍で人と人との関わりが減った中で身に付けられなかった力をコグトレでつけることができると思った。時間を見つけて取り組みたい。

研修を受け、新たな気づきや課題を見いだせた。	3.72
研修で学んだことが、今後の教育活動につながるものであった。	3.68

【資料11】研修の振り返り（4件法によるアンケート）

【資料10】研修の振り返り（記述）

教育センター主催の研修（「北九州ステップアップメソッド（コグトレ）」の活用）の振り返り

（記述）【資料10】や【資料11】の4件法によるアンケートからは、「効果や実施方法が分かった、理解できた」ことや「新たな気づき」が、コグトレの実施や効果的な活用への意欲の高まりにつながっていることが分かる。このことから、継続的なコグトレの実践・活用を支えるためには、教師が日々の実践の中で「学びたい」「分かりたい」と感じた場面で必要な情報が得られる体制が必要と考える。教育センターでは、「kitaQ せんせいチャンネル」や「教育センターだより」を通じて、コグトレに関する情報提供・発信してきたが、【資料3】の◇項目の記述や、動画コンテンツの視聴状況（R6.2.8時点での「実践モデル動画『おしえて！コグトレ博士』シリーズ」：全11動画、総視聴回数1360回、平均視聴回数123.6回）からは、これらの情報が十分に周知・活用されていない様子がうかがえた。「コグトレ活用ハンドブック」と「kitaQ せんせいチャンネル」を中心に、情報のパッケージ化を図ったことは、資料や情報の有効活用や、「学びたい」「分かりたい」という教師の困り感やニーズに沿った支援につながるものであるといえる。これは、今後、各校や教師がコグトレの効果や実施方法を理解し、自立して取り組むための一助となると考える。

7 成果と課題

- コグトレの実施状況や資料等の活用状況、実施上の課題の把握により、教師の困り感やニーズに沿った資料や補助教材の作成、情報の周知の仕方を工夫することができた。
- すぐに使える形での資料等提供や情報のパッケージ化を図ったことで、「どの教師も」「無理なく」「効果的に」実践できる体制づくりにつながった。
- 多くの学校・教師から、「実施課題の選び方」に関して知りたいという要望が上がっていたが、コグトレは、「子どもの課題や困り感」と実施課題を明確に結び付けて示すことができるものではないため、十分な指導・助言、支援には至っていない。今後は、「コグトレハンドブック」掲載の「コグトレアセスメントシート」の活用と併せて、実施課題の選択に関する支援の仕方とその周知について考える必要がある。

〈参考文献〉

- ・宮口幸治著 「マンガコグトレ入門」 小学館 2022年
- ・宮口幸治・宮口英樹著「社会面のコグトレ 認知ソーシャルトレーニング1」三輪書店 2020年
- ・宮口幸治・宮口英樹著「不器用な子どもたちへの認知作業トレーニング」三輪書店 2014年
- ・北九州市教育委員会 「コグトレ活用ハンドブック」